愛農に来て一か月、すでに沢山のものを食べた。特に僕の大好きなたけのこは、ものすごい頻度で出ている。まさに天国だ。だが以外にもたけのこが嫌いな人が多く、悲しいような寂しいような気もする。

　たけのこのことはここらへんで置いといて、愛農のことのついて書こうと思う。先ほども言ったが、僕は一か月を愛農で過ごした。寮の先輩方も優しく接してくれ、料理などもでき、とても楽しい寮生活を送っている。

　ほかにも一つだけではないが嬉しいことがあった。それは、愛農には動物が多いことだ。愛農には、牛や豚などの家畜はもちろん、ウグイスや、猫、一匹だけだが犬もいる。特に猫が多く、野良も合わせると七匹ほどいる。そのなかで、ギンとレノンという猫はなかなか抱かせてくれないので、この三年間でどちらかでもすんなり抱けるようになりたい。

　猫つながりだが、先日猫の赤ちゃんを見た。牛舎の近くにいたそうで、一度は男子寮まで箱に入れられ連れてこられたが、また元の同じ場所に戻された。その理由は人のにおいがついてしまうと親猫が近寄りがたくなってしまうからだそうだ。初めて猫の赤ちゃんを見たが、ものすごく可愛かった。まだ目も開いていない状態で、手の感覚だけで周囲の様子を必死になって探っているのを見て生きようと本能から動いているのが見て取れた。隣で先輩が「このまま親が現れなければ、エサを食べられずに死んじゃうな」と言っていた。その後、寮に戻ってふと考えた。あの時、猫の赤ちゃんに対して「可哀想」と思ったが、家畜の場合はどうなのだろうかと。確かに、豚などが殺されて可哀想と少しは思ったことはあるが、子猫ほどではなかった。それはなぜか。子猫のほうが小さいから、子猫のほうが可愛いから？違う。子猫があくまでペットとしての存在で豚などは家畜としての存在だからだ。豚は食べるため、食べるためには「殺さなければ」ならない。それを自分は当然のように思っていた。豚にも命があって必死に生きようとしているのだ。それを人間の勝手で殺している。僕は生きてきたこの１５年間で無意識のうちの生き物の命の価値を見失っていた。命の価値は、はかりしれなく、どこまでも続いていくもので、全生物共通のものだ。このとき久しぶりに命について考えた。

命について考えてから少し経った後に、実習で鶏の解体があった。解体以前に「包丁で生き物を殺す」ということをしたことがなかったのと、先日命のことについて考えたのとで、少し怖かったが引き受けたのは僕なので、やることにした。実習が始まってすぐに解体を始めるのかと思ったが、そうではなく解体の前には、お祈りがあった。お祈りは、実習を行う人で円になって手をつなぎ、養鶏部の山口さんが口頭するお祈りを皆で復唱するというものだった。お祈りをしている最中にやっと、今から自分の手で生き物の命を奪うという実感がわいてきた。そして、お祈りの後、解体が始まった。鶏の首を切るまでの過程も大変だったが、首を切るほうが精神的にももっと大変だった。先輩には一瞬で切ることが大事と言われたが、うまく切れずに何度も何度も切り込みをいれてしまった。苦しませずにすぐに楽にさせることができなかったのが、心残りだった。そのあとは、血抜きをして、毛を抜き、いよいよ解体作業が始まった。触れてみて、動いていないが、まだ暖かく、手についた血も鮮やかで、それがより一層自分を惑わせた。その後も解体を続けていて思ったことがある。最初は生きていたと感じていたが解体が進むにつれ、どんどん「もの」のようになっていくのを感じた。これは、朝拝で直木さんも言っていたが、本当にそう感じるとは思ってもみなかった。「もの」のように感じてから作業が早くなっていった。慣れたくないと心では思いながらも、無意識のうちに慣れ始めている自分がいた。それと同時に命に関わる時間に慣れなどあってよいものなのかと疑問にも抱いた。結局その日は３匹分くらいしか解体しなかった。が、しかし、「気持ち悪い」や「怖い」だけですべてが終わったわけではない。鶏の内臓の器官のこともよくわかったし、なにより、改めて命の重み、尊さを知れた。

鶏の解体をしたその日の夕食で気づけたことがあった。それは、ご飯の時の、「いただきます」と「ごちそうさま」についてだ。少し前までは、食前と食後の当たり前の「動作」として行っていた。だが、それは全くの無駄な行為である。食前は「いただきます」食後は「ごちそうさまでした」をしっかりと感謝をこめて言う。その当然なことが僕はおろそかになっていた。鶏の解体のおかげでそのことに気付けたし、「慣れ」ということがいかに自分にとって重要かということにも気付けた。愛農という場所は僕にとってここまでも大事なことを気付かせてくれた。そしてこれからも、新しいことを教えてくれるはずだ。

　１か月過ごすだけで、ここまでのものを得られる愛農は「すごい！！」と思うが、不安がないわけではない。

　愛農高校はキリスト教が母体の高校だ。もちろん授業にもキリスト関連のものがある。僕は家がキリスト教ではなかったので讃美歌などをうたったことはなかったが、歌うことは好きだったのですぐ馴染むことができた。しかし、聖書は別だ。聖書にはたびたび「神を愛する」というフレーズが出てくるそれがどうも自分にはわからない。そもそも神とは何なのか。僕が思うに、神とは「自分が信じる」ものだと思う。「自分が信じる」ものは漠然としたイメージだが、感じることはある。

僕は９歳の時と１１歳の時に交差点で事故にあった。いや起こしたというべきだろうか。どちらにせよ、９歳の時の事故は自分の注意不足が招いた事故だった。１１歳の時の事故は車とすっただけだったが十分危険だった。奇跡的にそのどちらの事故でも僕は無傷だったのだ。そういうとき、自分はその目に見えない「自分が信じる」ものに救われたと思うのだ。しかし、その「神」のことに関して思ったことがある。それは、何事も「自分の頭でも考えることが大事」だということだ。この学校は何かあるとすぐに「神」というが、それを、何も考えずにただ単純にうのみにするのではなく、自分にとっての神、僕でいう「自分の信じるもの」をしっかりと持つことが大事だと思った。だが、ここまで分かっても、やはり、神との関わり方、愛し方が分からない。直木さんやほかの教師は言う。「愛しなさい」と。それが僕にできるのだろうか。そこが今、愛農での唯一の不安点だ。

　だが、土を愛することはできる。土に触れて、耕し、水をあげられる。神からの恵みの植物を育てる土を愛せば、神を愛せるようになるかもしれない。そうなれば自分の世界を見る視野が広がるはずだ。この３年間で僕がすべきことは「土を愛すること」だと分かった。

　１か月たって４つの部活に入った。ラグビー部は、入りたてなので何が何かわからないが、スクリューパスを覚えることが今の自分の目標だ。もちろんほかの３つの部活も頑張る。そして部活のことに限らず、色々なことに挑戦し、失敗して、成長していきたい。